北海道医歌人会詠草

幌北小学校二期同期会

札幌　古屋　統

巣立ちし子百四十の同期会七十年経て十二名寄る
教頭の出迎えのなかテレビ局歩み衰へしわれらを写す
連帯を一年生から教へるとデスクパソコン並ぶ部屋あり
北十九条藻岩往復遠足は信じて貰えぬむかしの話
資料室卒業アルバム名簿あり小使さんが振りし鐘あり

フラテ祭二〇〇九

美唄　吉村　誠治

学成りて五十七年キャンパスの思ひ新鮮バスにて巡る
都ぞ弥生・恵迪寮記念の碑・ポプラ並木あり青春のありき
新旧のポプラ並木を見上げつつ百二十五年の歴史重たし
フラテ祭講演会の講師二人放射線科の同門は嬉し
寮生に牛乳恵みし農場跡最尖端の研究棟並ぶ

ニセアカシア

札幌　浜島　泉

葉の緑花の白きが点描にニセアカシアの匂ひ立つとき
遥かなり花の図鑑の書き込み日山の名前と同行者の名
逝きし人の容体経過われに告ぐる同期の友の言葉に瞑す
タンバリン振りカラオケに親しむ人痰に喘ぎし去年今ごろ
回診医室を去る時手を振るに利き手を揺らすおぼつかなげに

遡上

釧路　児玉　昌彦

我こそはパイオニアたらんと懸命に瀑飛び越ゆる鮭に続かば
苦労して堰を越えても報はれぬ世の不条理を鮭は怒れよ
早々と遡上挫折し川口に身横たへる鮭なり我は
寄り添ひて産卵に向かふ鮭の親仔の誕生を見ずに果つるを
力尽き倒れし鮭の傍らに稚魚群れてをり冬近き川

牧場の秋

栗山　高田　剛太

牧場の朝は静かに明けてゆく遠くで馬の嘶(いなな)きひとつ
お互ひに散歩の途中で出くわした狐驚き草陰に消ゆ
軽やかに丘駆け登るエゾシカは高みに停り吾を凝視す
朝露に濡れる牧草踏みゆかば霞の彼方に日高連峰
薄の穂かすかに揺らす秋風を想ひ出として胸に吸ひ込む

三陸旅行

旭川　稲積　文子

三陸の浄土が浜にて捕れたての海鞘(ほや)のひと口の味未だ忘れ得ず
田老にてふたたび海鞘を特注しその時の酒更に美味なり
選管の公職終へて帰路につく(投票日)午前五時路上に鴉が騒ぐ
二時宵の睡眠とりて患者診る体力気力まだ吾れにありしか
世俗より離れて独り住み給ふ笑顔やさしき恩師の奥様

雲

江別　三宅　浩次

名のごとく暑さ寒さを分かちたる暑寒別岳雲沸き立ちぬ
そそり立つ夏雲の果て空遠く秋の予感の青の深色(ふかいろ)
雲よ雲お前の下の貧しさを知らぬで済ます訳には行かぬ
定まらぬ雲の流れに相似(あいに)たり人の定めの不可知ぞ不可知
雲を知り明日の天気を言ひ当てる昔の人は偉いと思ふ

覚醒剤

札幌　山口　康徳

微妙なる風の気配を悟れるや人に知らせむと木の実(ナナカマド)色づく
秋の陣突如襲(おそ)ひし政変は狂乱怒濤(どとう)見るが趣
外来種狭き日本に蝟集(あつま)りて古来の生物身すくめをり
エリートも覚醒剤に手を染むる混乱きはむすごき世の中
水槽を屈託なげに上下する膃肭臍(おっとせい)みる客の眼凝縮

追悼

札幌　小国　孝徳

昭和七年に茂吉の訪ひし北大精神科在りしあたりをよぼよぼ歩む
はからずも茂吉の訪ひし精神科歌残さねば偲ぶよすがもあらず
東京より来りし茂吉先輩をもてなさざりしか内村教授
浜名湖を囲む地域の医師会長ながく勤めて君も逝きたり（内田智康君）
戦争のさ中に七十八名卒業して戦死を含む六十三名は亡し